

第46回

インドネシア〈後編〉

Indonesia (Part 2)

“民意”のインドネシア

——独立と独裁と併合の近現代史

リクルート=スタディサプリ講師 村山 秀太郎

オランダからの独立達成

インドネシア独立運動とナショナリズムの担い手は、かのデヴィ夫人の夫のスカルノと、モハマッド・ハッタだった。オランダ植民地政府は1933年と34年にこの2人を逮捕、流刑にするに至り「倫理政策」は終結した。日本は真珠湾攻撃の翌年の1942年に天然資源を求めオランダ領東インド(蘭印)に進駐、占領地全域で軍政が始まると、彼らは流刑先から解放され政界に復帰した。日本の敗戦直後の1945年8月17日にスカルノはインドネシア独立を宣言したが、その日付には日本の「皇紀2605年」が使用された。独立を認めないオランダは軍を派遣し、「インドネシாமルデカ」(インドネシア語やマレー語で「独立」)と呼ばれた独立戦争が勃発する。この闘争には旧日本兵の協力などもあり、インドネシアが勝利、1949年のハーグ協定でオランダからの独立を達成した。



大東亜共栄圏：日本の同盟国と最大占領地
(1942年時点)

日本の十銭切手
1942年12月1日発行、
1947年使用禁止

スカルノからスハルトへ

独立後に大統領になったスカルノは、安定

した政権運営のため議会を解散し、強大な権限を得た。1960年頃からのスカルノ政治のキーワードの1つが「ナサコム／NASAKOM」だ。

これはインドネシア語の民族(Nasionalisme)、宗教(Agama)、共産主義(Komunisme)の頭文字を合わせた造語で、民族主義・イスラーム教・共産主義を融合させた、独自の国家建設の理念である。

しかし、これが運命の1965年につながってしまう。陸軍内の共産主義者勢力が国軍首脳部を暗殺したクーデター「9月30日事件」が起きるや、スハルト少将率いる右派軍人勢力が迅速に鎮圧し、「共産黨員狩り」を開始。その犠牲者は50万人とも300万人とも言われ、東南アジアで最大規模を誇ったインドネシア共産党は壊滅、軍人勢力と共産党のバランスだったスカルノの求心力は完全に失われた。背景には、スハルトによるクーデター説や、左傾化するスカルノに見切りをつけたアメリカの関与説などがあるが、「ドミノ理論」に基づく共産党弾圧目的の資金がアメリカから流れたことは米国務省の機密文書から判明している。1965年といえば、冷戦下のアメリカがベトナム戦争を始めた年だ。混乱の中、スカルノ



スカルノ
初代大統領



スハルト
第2代大統領